

〈特集「モダリティ」〉

パピアメント語におけるモダリティ Modality in Papiamentu

パトリシオ バレラ アルミロン
Patricio Varela Almiron

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿の目的は、特集「モダリティ」(『語学研究所論集』第16号, 東京外国語大学)における30個のアンケート項目に対するパピアメント語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Papiamentu data which answers the 30 survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 16, which focuses on the cross-linguistic study of ‘modality’.

キーワード：パピアメント語, クレオール言語, モダリティ, 補助動詞, TAM 標識

Keywords: Papiamentu, creole, modality, auxiliary verbs, TAM markers

1. はじめに

パピアメント語は主にアルバ島, ボネール島, キュラソー島(3つの島の頭文字を取り「ABC諸島」とも呼ばれる)で話されているクレオール言語である。基本語順はSVOであり, 修飾語と被修飾語の語順は品詞(場合には語彙)によって異なる。本稿における表記はキュラソー島の正書法を採用している。

本稿の作成にあたり, J.C.氏(キュラソー島出身, 1990年生まれ, 男性)の協力をいただいた。

2. 言語データ

パピアメント語において許可を表す形態素は補助動詞の *por* である (3-1)。Por は許可・可能・可能性を表しうる。

(3-1) (その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。【許可】

Bo por bai kas bek.

2SG can go house back

否定助詞の *no* が動詞に先行する形で禁止を表すことができる。これは禁止を直接表す方法となる。そのほかに, 許可や可能を表す補助動詞 *por* を否定する形で「食べることができない」という意味が語用論的に「食べてはいけない」として解釈される。(3-2)にこの2つの表現を挙げる。



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

(3-2) (腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない/それを食べるな。【禁止】

Bo no por kom=é. / No kom=é.
2SG NEG can eat=3SG NEG eat=3SG

義務を表すのに補助表現の *tin ku* が用いられる (3-3)。これは動詞 *tin* 「もつ・ある・いる」に補文標識 *ku* がついた形である。ほかに同意味の *tin di* という補助表現¹が存在する。*Di* も補文標識である。ただし、J.C. によるとキュラソー島方言ではあまり用いられないという。

(3-3) (遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。【義務】

Nos tin ku bai bèk.
1PL have that go back

推奨を表す表現が2つある。1つ目は、義務を表す補助表現 *tin ku* を非現実の標識 *lo* と一緒に用いるものである (3-4 a.)。2つ目は [ta mihó + 節] 「～するのがよりよい」という表現である (3-4 b.)。

(3-4) (雨が降るそうだから) 傘を持って出かけたほうがいいよ。【推奨】

a. *Lo bo tin ku sali ku un paraplü.*
IRR 2SG have that go_out with a umbrella
b. *Ta mihó bo sali ku un paraplü.*
COP better 2SG go_out with a umbrella

評価的義務を表す表現が2つある。1つ目は (3-3) と同じく *tin ku* という補助表現である (3-5 a.)。2つ目は補助動詞 *mester* 「～すべきだ」を用いるものである (3-5 b.)。

(3-5) 歳をとったら、子供の言うことを聞くべきだ/聞くものだ。【評価的義務】

a. *Asina bo bira bieu, bo tin ku skucha kiko bo yu=nan ta bisa.*
as 2SG become old 2SG have that listen what 2SG child=PL IPFV say
b. *Asina bo bira bieu, bo mester skucha kiko bo yu=nan ta bisa.*
as 2SG become old 2SG must listen what 2SG child=PL IPFV say

パピアメント語において希望を表すのに補助動詞 *ke* 「～したい」が用いられる (3-6)。

(3-6) お腹が空いたので、(私は) 何か食べたい。【希望】

Mi tin hamber. Mi ke kome algu.
1SG have hunger 1SG want eat something

1人称の意志を表すのに *laga=mi* 「私に～させてください」という表現を用いる (3-7)。Laga はこの場合、補助動詞として働くが本動詞としても用いられ、「放置する」という意味を表す。

¹ Andersen (2000: 67) は *tin ku* と *tin di* を “Quasi modal auxiliaries” 「準法助動詞」と呼んでいる。

(3-7) 私が持ちましょう. 【意志】

Laga=mi karg=é pabo.
let=1SG carry=3SG for_you

聞き手の意向を予測し勧誘する場合は *laga nos*「私たちが~しましょう」という表現が用いられる (3-8).

(3-8) じゃあ, 一緒に昼ご飯を食べましょう. 【勧誘】

Awel bon, laga nos lunch huntu.
then good let 1PL lunch together

相手の意向が不明な場合に勧誘を表す場合は, 希望の補助動詞 *ke* を用いて聞き手に質問をする (3-9). 勧誘の内容は補文標識の *pa* によって導入される.

(3-9) 一緒に昼ご飯を食べませんか? 【相手の意向が不明な場合の勧誘】

Bo ke pa nos lunch huntu?
2SG want for 1PL lunch together

話し手の制御できない希望を表す場合は 2 つの表現が可能である. 1 つ目は希望の内容を補文標識の *si* (英語の *if* に当たる) によって導入する. その内容について *ta bon* という表現を使って, 望ましいという点を表し, さらに非現実の *lo* で実現の可能性がそれほど高くないことを表す (3-10 a.). 2 つ目は *spera* 「希望する」という動詞を用いて, 希望内容の表す節を目的語のように扱う表現である (3-10 b.).

(3-10) 明日, 良い天気になるといいなあ. / 明日は良い天気になってほしいなあ. 【希望】

a. *Lo ta bon si wer lanta bon mañan.*
IRR COP good if weather rise good tomorrow
b. *Mi ta spera wer ta bon mañan.*
1SG IPFV hope weather COP good tomorrow

パピアメント語においては命令は目的語などに続かない場合, 動詞の声調パターンが変化することがある (Departamento di Enseñansa Aruba 2010: 44-45). しかし, 目的語などが続く場合は無標の動詞と同形であるため命令が主語と TAM 標識を省略した平叙文の形を取ることが多い (3-11)².

(3-11) (私はここで待っているから) すぐにそれを持って来なさい. 【命令】

Trese e kos ei mesora.
bring the thing there right_now

懇願を表すのに許可や可能を表す補助動詞 *por* が用いられる (3-12).

² Departamento di Enseñansa Aruba (2010: 45) によると, パピアメント語において不規則な命令形をもつ動詞が 3 つある. それらは *bai* 「行く」(命令形: *ban*), *ta* 「である」(命令形: *ser/sea*), *tin* 「もつ」(命令形: *tene*) である.

(3-12) そのペンをちょっと貸していただけませんか? 【懇願】

Bo por fia=mi bo pèn un ratu?
2SG can lend=1SG 2SG pen a bit

パピアメント語には能力可能と状況可能の区別がなく、どれも補助動詞 *por* によって表される (3-13, 3-14).

(3-13) あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。 【能力可能】

E por lesa chines.
3SG can read Chinese

(3-14) 明かりが暗くて、ここに何が書いてあるのか、読めない。 【状況可能】

E lus ta suak. Mi no por lesa loke tin skirbí aki den.
the light COP weak 1SG NEG can read what have written here in

(3-15) では、義務を表す補助動詞 *mester* を非現実の標識 *lo* と合わせることによって話者の確信を表す。

(3-15) (朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ／もう着いたに違いない。 【確信】

Nan lo mester a yega kaba sigur.
3PL IRR must PFV arrive already surely

推量を表すのに副詞の *porta* 「たぶん」(語源的に許可・可能・可能性を表す補助動詞 *por* とコンピュータ動詞 *ta* に由来する) と非現実の標識 *lo* が用いられる (3-16).

(3-16) (あの人は) 明日はたぶん来ないだろう。 【推量】

Porta e lo no bin mañan.
maybe 3SG IRR NEG come tomorrow

疑念を表すのに推量と同じく副詞の *porta* 「たぶん」と非現実の標識 *lo* が用いられ、さらに聞き手に聞く形で確認を求める (3-17).

(3-17) 彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。 【疑念】

Ta inkreibel ku nan no a yega ainda, nan outo
COP unbelievable that 3PL NEG PFV arrive yet 3PL car
lo mester a dañá na kaminda, bo=n ta haña?
IRR must PFV break_down at road 2SG=NEG IPFV get

パピアメント語においては可能性を表すのに、許可・可能と同じく補助動詞 *por* が用いられる (3-18).

(3-18) (昼間だからあの人は家に) さあ、いるかもしれないし、いないかもしれない。 【可能性】

Ta merdia, kemen e por ta òf no na kas, ken sa.
COP noon that_means 3SG may COP or NEG at house who know

パピアメント語には話者の判断を表す表現として *parse* 「似ている」という動詞が用いられ, 判断の内容は補文標識 *ku* によって導入される従属節によって表される (3-19). この形式は視覚, 聴覚, およびその他の感覚でも用いられる.

(3-19) (額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ. 【視覚/聴覚以外の感覚による判断】

Ta parse ku bo tin keintura.

IPFV look_like that 2SG have fever

パピアメント語では伝聞専用の形式が存在せず, *tende* 「聞く」という動詞が用いられ, 伝聞の内容は補文標識 *ku* によって導入される従属節によって表される (3-20).

(3-20) (天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ. 【伝聞】

M=a tende ku awa ta bai kai mañan.

1SG=PFV hear that water IPFV go fall tomorrow

反実仮想と反実仮想過去はどれも似た表現を用い, 補文標識 *si* に導入された条件節の動詞が完了か未完了過去の標識に先行され, 主節では非現実の標識 *lo* と完了の標識 *a* が用いられる (3-21, 3-22). (3-21) と (3-22) ではそれぞれ完了の標識 *a* と未完了過去の標識 *tabata* (本来の *taba=tin* から *ba* が脱落した形) が用いられるのは, 構文の違いではなく, 動詞の意味的アスペクトに起因するのであろう. *tin* 「もつ・ある・いる」は完了の標識 *a* と一緒に用いられない状態動詞であるため, 未完了過去の標識 *tabata* が用いられるのに対し, *bisa* 「言う」は動作動詞であるため完了の標識 *a* が用いられていると考えられる.

【反実仮想】

(3-21) もしお金があったら, あの車を買うんだけれどなあ.

Si mi ta=tin sén lo mi a kumpra e outo ei.

if 1SG IPFV.PST=have money IRR 1SG PFV buy the car there

【反実仮想過去】

(3-22) もしあなたが教えてくれていなかったら, 私はそこにたどり着けなかったでしょう.

Si bo no a bisa=mi, lo mi no por a yega einan.

if 2SG NEG PFV say=1SG IRR 1SG NEG can PFV arrive there

パピアメント語において3人称でも1, 2人称と同じく希望を表すのに補助動詞 *ke* 「～したい」が用いられる (3-23).

(3-23) (あの人は) 街へ行きたがっている. 【3人称の主体による希望】

E ke bai kaya.

3SG want go town

(3-24) では *laga=mi* 「私に～させてください」という表現が用いられる. これは (3-7) の1人称の意志と同形である. (3-25) でも *laga* 「放置する」という動詞が用いられ, その目的語の3人称代名詞が持っていく「人」を表しているのに対し, 後続する *karga* 「負う」の目的語は持たれる「もの」を表してい

る。

(3-24) 僕にもそれを少し飲ませろ。【1人称命令】

Laga=mi bebe un tiki tambe.

let=1SG drink a little also

(3-25) これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう。【3人称命令】

Lag=é karg=é.

let=3SG carry=3SG

(3-26) では (3-11) と同じく無標の動詞の形で命令形を表している。遠未来は副詞句 *mas lat* 「より遅く」によって表される。

(3-26) そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。【遠未来命令形】

Kome e mangel=nan ku ta riba mesa mas lat.

eat the candy=PL that COP on table more late

(3-27) では2つの TAM 標識 (過去未完了の *tabata* と完了の *a*) と許可・可能・可能性の補助動詞 *por* が条件節に用いられている。Solamente という副詞を用いることによって「もっと早く来ることすらできていればよかった」という意味合いになる。

(3-27) もっと早く来ればよかった。【反実仮想】

Solamente si mi tabata por a yega mas tempran.

only if 1SG IPFV.PST can PFV arrive more early

パピアメント語では推奨や勧誘をする場合、主節を省略することが不可能であり、必ず (3-28) のように主節「あなたがどう思う？」と従属節「あなたが私たちと一緒に行くこと」が必要となる。

(3-28) あなたも一緒に行ったら (どうですか) ? 【脱従属化】

Ki bo ta pensa si bo bai ku nos?

what 2SG IPFV think if 2SG go with 1PL

パピアメント語では疑問詞を含まない反語はあり得るが、1人称が「知るわけない」ことを表す場合は必ず疑問詞 *kon* 「どうやって」もしくは *ki* 「何」を使わなければならない (3-29)。

(3-29) オレがそんなこと知るか! 【(疑問詞を含まない) 反語】

Kon mi por sa!

how 1SG can know

Ki ami sa!

what 1SG know

付加疑問は副詞 *tòg* 「しかし／でしょ」によって表される (3-30)。

(3-30) これを作った (料理した) のは, お母さんだよね? / いいえ, 私が作ったのよ. 【付加疑問】

A: *Ta bo mama a kushiná e kuminda aki, tòg?*

FOC 2SG mother PFV cook the food here right

B: *No, ta ami a kushin=é.*

NEG FOC 1SG PFV cook=3SG

略号一覧

| | | | |
|---------|------------|-----|----|
| 1, 2, 3 | 1, 2, 3 人称 | NEG | 否定 |
| COP | 冠詞 | PFV | 完了 |
| FOC | 焦点 | PL | 複数 |
| IPFV | 未完了 | PST | 過去 |
| IRR | 非現実 | SG | 単数 |

参考文献

Andersen, Roger W. 1990. Papiamentu tense-aspect. Singler, John V. *Pidgin and creole tense-mood-aspect systems*, pp. 59-97. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Departamento di Enseñansa Aruba. 2010. *Manual di Gramatica di Papiamento – Morfologia*, Aruba: Departamento di Enseñansa.

執筆者連絡先 : varela.almiron.patricio.o0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021 年 12 月 8 日